

## 塚田知香（つかだ ともか）

准教授

専門分野／産業・組織心理学、臨床心理学



早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。修士（文学）。心理学的ストレスモデルの観点から職業性ストレス研究を行う傍ら、企業内カウンセリングルーム・精神科クリニックでカウンセラーを経験。白梅学園短期大学非常勤講師、大正大学非常勤講師、白梅学園大学非常勤講師、東京成徳大学経営学部助教を経て、平成 25 年現職。

著書：『ソーシャルサポートの測定と介入』（共著、川島書店、2005）、『ワーク・エンゲイジメント～基本理論と研究のためのハンドブック～』（共著、星和書店、2013）

### 私の思い出 ～大学時代のサークル合宿の思い出～

私は、大学 1 年生からの 4 年間、40 年以上の歴史があり、常時会員 100 名超の大規模なバドミントンサークルに所属していました。私は中学・高校を通して真剣にバドミントンをやっていたので、大学でもバドミントンを続けたかったからです。また、人数が多く歴史も長ければ、バドミントン以外にも面白いことに出会えるのではないかと期待もありました。実際、そのサークルで、これまでの人生では付き合うことのなかったような先輩や同期など、面白い人物との出会いに恵まれ、様々な経験をすることができました。

中でも最も印象に残っているのが毎年夏休み・春休みに開催される合宿です。これは、3 年生全員が幹事になり、1 週間の合宿を企画・運営するというものです。小さめの民宿を貸し切り、民宿の近くの体育館を手配して、毎日朝から班に分かれてランニング、フットワーク、ノック等、真剣にバドミントンの練習をします。最終日には班対抗試合があり、順位の高い班がより多くのビールを獲得できるシステムです。前の晩は徹夜をして、班の応援旗、班長試合で班長が着る衣装を作り、皆で応援しました。最終日の夜は、いつまでも終わらない打ち上げがあって、宿にご迷惑をかけないように床一面に新聞紙を敷いて、あちこちにバケツを設置して・・・、辛くなったら休める、通称「死人部屋」という場所までありました。最後には「伝統芸」といわれる、全員が 1 つずつ座布団を持って叩きあうという謎の催しがあり、興奮が最高潮に達して大団円を迎える、というのがいつものパターンでした。出発の朝には、班ごとに輪になり、1 人ずつ感想を述べていくのですが、多くの人がそれぞれに思うところがあり、感極まって涙してしまうものでした。

今では、たまの週末に軽くシャトルを打つだけで息も絶え絶えですが、バドミントン愛は健在です。皆さんも、学生時代には、語りだしたら止まらないくらいの濃い思い出を、1 つでも多く作ってください。